

---

# 失われた世界

紅姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

失われた世界

### 【Nコード】

N9737T

### 【作者名】

紅姫

### 【あらすじ】

2ヶ月前に発生した尖閣諸島の謎の爆発。はたして・・・？

## 始まり

風が叩きつけられるようにしてかつて、そこに存在していた島の上で数機のエリコプターが旋回していた。

日本時間 2011年4月13日午前2時42分

尖閣諸島と中心に大規模な爆発が発生した。

それにより領海侵犯をしていた中国の軍人と石油を採掘をしていた民間業者は全員死亡

原因不明の爆発という事もあったが、中国としては民間人・軍人ともに死者がでていた為、領海侵犯していた事を棚に上げて日本を非難していた。

当然、新聞各社メディアなど世界中で話題となっており、領海侵犯し他国の資源を無駄に採掘して事故にあったその国には同情は一切発生していなかったが、それでも中国は自国の政策を日本へ擦りつけて自国内の政治を安定させる事は、急務であった。  
中国の政策の方法は基本的に北朝鮮と大差がないからだ。

歴史的観点から見れば、天安門事件で多くの学者や知識人を皆殺しにして自分の政党を有利な立場にした事は長い目から見れば中国の発展を大きく後進させたと言わざるえない。

それすらも、日本の関東軍を叩いて目を逸らす事により反日感情を



東経 1 2 3 度 0 0 分 - 1 2 5 度 0 0 分

午前 2 時 4 2 分から 4 5 分までの連続衛星写真を君たちに見てもらいたい。」

次々に画面が切り替わっていく。

「なんなんだこれ？」

「これはまさか？」

「そう、以前太平洋上で島が断続的に現れたり消えていたりしたが、それと同じ現象だ。」

「おそらく、石油採掘をしていた会社の者はなんらかの要因により遺跡を起動してしまいそれにより異界へ隔離され、その際に発生したエネルギーにより大規模な爆発が起きたと推論される。」

「まじかよー、いくら自分の国の急激な発展で石油が足りないからって人さまの国にきてまでそんな事すんなよな」

「ジャン、言いたい事は分かるが・・・で博士それで何か問題でも？」

「だけどな！御神苗、おまえも・・・」

と金髪の髪の少年が言う前に別の言葉が遮る。

「うむ、今、この（元）尖閣諸島があつた辺りは大変不安定な状態になっている。この衛星写真を見て欲しい。」

「1111一週間ほどの写真だ」

次々と投影される衛星写真

「山本さん。これって最近の写真になるにつれて写真に写る大陸が増えてきてないですか？」

「優、そうなんだ。アーカムの見解だとあと2ヶ月もしないうちに、アメリカ合衆国の作家、ジェームズ・チャーチワードが唱えていた巨大な大陸が現れる可能性があるという事だ。その大陸が発生した際の余波は旧約聖書のノアと同じく大津波が発生すると考えられている」

「それまでに今回発生したこの時空の歪の原因を封印もしくは破壊してほしい。」

「まじかよ？なんで中国が起した事をわざわざ俺達がやらないといけないんだよ？中国政府にやらせるよな。」

「残念ながら中国から特殊チームを派遣したが全て交信は切断。応答が途絶えてすでに一週間が経っている。」

「それで、今回は国連を通して依頼があったというわけだ。」

「悪いが、俺はそういう身勝手な連中の尻拭いをするほど暇じゃないんでな。今回の話はパスさせてもらっわ。」

「優はどうする？」

「山本さん、今回の話はどうも気なくさい。もう少し考えさせてくれ」

そう言っつて二人は会議室から出て行つた。

「山本さん、今回はいかにも中国に非がありすぎる。そんな状況下でスプリガンを出すわけにはいかない。」

剣山副所長がそう言い

「まあ一人、宛てがありますがそいつだつたら少しお金積みめばやってくれるかもしれませんかどうしますか？」

・・・

はあ、と後ろで博士と呼ばれたオリハルコン研究の第一人者が溜息をついてその場を見ていた。

## 日常と非日常

「はあー雨って憂鬱になるよね・・・」

時間は午後20時・・・雪が通ってる定時制の学校は終わるのが遅いのだ！

学校の時間は午後5時45分から午後9時5分まであり授業は4時間 さらに学生の食堂でご飯もついてくるという貧乏学生の雪にはとってもありがたーい学校であったりする。

そつ何を隠そつ。名実共に女の体になった雪は髪の毛が腰まで届く長さまでなった為、髪の毛とかべたつくし、湿気により体の線が透けて見えるようになるのがとっても嫌だったりする。

だからこそその開口一番目の言葉なのだろう。

「なんで雨が嫌なんだ？」

同学友の安部が話しかけてきた。

「だって、濡れたら困るでしょ。」

ストレートでは恥ずかしい為、遠まわしに言うが・・・

「別にいいじゃん、気にスンナよ。」



空気が一遍足りとも読めてない学友は言ってきた。

「それに駅までいくのに、丘の上にある学校からだ、丘を降りて高速の下をくぐってからずーと線路沿いに歩いても10分はかかるんだよ？こんなに雨降ってたら靴の中までぐっしょりだよ！」

そこまで雪は言ったところでいい事を思いついた。基本定時制は私服の車通学が許されている。昼間の高校とは違ってとってもゆるいのが特徴である。

「安部！いい事思いついちゃたよ！」

「なんだ？」

「定時制の人に駅まで車で送って行ってもらえばいいんだよ！」

「なるほど・・・お前もたまには頭つかうんだな・・・」

「たまには余計だよー」

雪はそのまま安部の顔を下から睨んだ。安部としては、女になった雪に対して抵抗があったわけでもない、むしろ喧嘩をして友達になった雪を女になって帰ってきたときは性転換したのか？と聞いて殴られたのは悪い思い出だ。

よく、雪と一緒に仲間数人と遊んでる事もあり超常現象に会うことはたびたびあったのでその辺は理解者でもある。

それは横においておいて、今の雪は相当の美人というかかわいい系の美少女になっている為、前は学校の男どもいじって遊んでいたが、最近、定時制は女子が少ない事もあり雪に対して癒しを求める奴らが多いため、そこが安部にとって問題点だった。安部としても雪

は大事な友達であり彼女にしてみたい・・・けふん

そんな妄想を考えてるうちに雪が戻ってきた。

「安部〜。だめだった・・・今日は帰るしかないぽいよ。」

「まあ諦めろ、嫌なら免許とって車買え。」

「そんなお金ないよー」

と不毛な話をしていた。

.....

アーカム日本支社にて会議室で対策をしていた翌日

「はあ困りましたね。山本さん」

「ああ、だが今回だけは自業自得だからな。中国もきちんと自分達がやった尻拭いはきちんとしてもらわないとな」

アーカムに所属してるスプリガンはトライデントと現在睨みあいをしておりすぐに動ける状態ではない。しかも古代遺跡を領海侵犯してきた上に勝手に起動したとあってはどうにもできなかつた。

「日本側の尖閣諸島を中心とした余波が懸念される人が住んでる島民の避難は日本政府の指示により終わっています。今回一番被害が会うのは台湾と中国沿岸部ですね。沖縄と西沿岸部にくる津波などについては、そっち方面に詳しい者がいるのでその者に任せてます。」

「そうか。だがまさか剣山、お前が言ってた者まで動かないとはな。」

「割のいいアルバイトを見つけたみたいで、危険な仕事はしたくないと言われてしまいました。」

「軍事関係の仕事なのか？」

「コールセンターとか言っていました。」

「そうか」

山本はそう言いながらもスプリガンクラスの實力のある者がアルバイトってどうなんだろうな・・・と誰でも考える事を思っていた。

.....

その頃、場所は代わり

全人代常務委員会のTOPは顔をあわせて話し合いをしていた。

「ばかな！国連を通して、アーカム財団とトライデントに依頼を掛けたと言うのに両陣営から拒否されただど？」

「我が国が世界の経済を潤してるという現実が理解出来ないのか？」

「国家主席、それと中央軍事委員会から話が・・優秀な風水師に調べさせたところ、龍脈の影響から尖閣諸島のあつた辺りで強力な結界が張られており、今後、尖閣諸島で起きると推測される異常気象などすべて、日本側の結界に阻まれて一方的に台湾と中国沿岸部に押し寄せてくると言っています。」

「日本側がやったことか？」

「いえ、衛星写真でも船が来てる様子は見えていません。」

「それと一人、影からしか特定できませんが、この写真を」

「ふむ」

「女性のようにですが、時速400kmの近い速度で近づいてきて数秒後姿を消した跡があります。」

「君は単独で空を飛んで、核ミサイル数十発分のエネルギーを反射させる装置を展開できる人間がいると？空を飛ぶなど日本のアニメで十分だ。だいたい風水師など非科学的だ。信用できるわけないだろうが！！」

「こんな事を報告する暇があるならば、さっさと軍を派遣して事態を収拾させる。もう時間がないのだぞ？」

「わかりました。」

「主席、今回の事があり、日本の企業も手を家族と一緒に日本に一時的に戻しています。そちらはどうしましょうか？」

「好きにさせておけ、あんな島国には何も出来ないだろうからな」

## 政治が悪いのは市民のせいです

チャイナワールド・サミットウィング北京の一室では二人の男が話しをしていた。

「ワン・シェンウー、お前が提示した内容はお偉いさん達は理解してくれなかったようだぞ?」

「そうですね、それは困りました。」

「お前が調べた内容だが、これは間違いないのか?」

「はい、間違いはありません。」

「そうか・・・」

中央軍事委員会 副主席 リー・リンウー は先日、衛星写真に写った女性の写真をワンに見せながら聞いた。

「これを見て、どう思う?」

「・・・これは?」

「シルエットだけでまだ判別はつかないが、この者がお前が調べる前に尖閣諸島付近で確認されている。」

「・・・」

ワンは見せられた写真について思案していた。何もない状態でこの速度で人が移動できるものなのか？そもそも、尖閣諸島があった付近で展開されていた地脈を応用した術は人が作り出せる物とは到底思えない・・・もしこんなのを作り出せる人間がいるとしたら・・・

「リー副主席、いまだに憶測の域は出ませんがこの者を使えばもしかしたら尖閣諸島で発生してる以上現象を防ぐ事ができるかもしれない。そして抱き込む事が出来ればかなりの軍事力と更なる祖国の発展に使えるかもしれませぬ。」

「そうか・・・」

「はい。」

「それでは、この者の特定と引き込み工作、尖閣諸島で起きてる現象への軍の派遣だな」

「この者の特定が出来たら、ワン、お前にも立ち会ってもらおうぞ。」

「わかりました。」

ワンとしても、これだけの術を作りこむ事ができる術氏と会うのは知的好奇心を満足させるために十分であった。

.....

2011年7月26日

中国政府は今、緊迫した雰囲気では国家主席を含めた数十人の要人が顔を揃えて会議をしていた。

あのもと、何度か尖閣諸島に軍を派遣したが軒並み通信は断絶

送った兵士と兵器を含めると損害は1千億を超えていた。

だが、それ以上に問題が発生していたのはこの2ヶ月の間に断続的に襲来するハリケーンや津波により沿岸部はほぼ壊滅、それに伴い地震も発生しており死者は数万人、経済的損失は数兆円に上っており、日本の企業と世界各国から資本と人材の引き上げが今尚続いておりそれがこの会議を緊迫した物へと変えていた。

そしてもう一つ、問題だったのがこの自然災害が日本・韓国・北朝鮮にはいかに中国のみを襲っているという事だった。

中国は生まれた子供の戸籍を登録しないで家庭の経済を支えさせている農村が多く、その数は実際登録してある人間と同程度の数に上る。いくらなんでも他国へ非難させるにはムリがあった。

国連や日本に外貨の援助を申請したが、中国経済が破綻するかもしれないという懸念が市場経済を守りの体制にしておりそこまで余裕のある国は存在していなかった。

この頃には、すでに情報規制をかけられる段階をすでに過ぎており



日本政府としては自国に被害が無い事から、資金援助だけに止めていた。なにせ、つねに災害が襲ってくるのだ。そんな国に自国の市民を災害救助という名目でも派遣するわけにはいかない。

そんな事もあり中国は今、身から出た錆で自国は窮地に追い込まれていた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

中国経済収束、死者多数、経済的損失などの情報うんぬん

そんな事をネットで閲覧してた雪は・・・

まあ、尖閣諸島に張った呪文って《バイハーバ》だからねーw

と自分の尻は自分で拭えとポテチを食べながらゴロゴロしてライトノベルを読んでいた。

はつきり言って、中国政府のやり方は雪は気にいらなかった。駄々を捏ねて欲しいものを入れて問題が発生したら人のせいにする。やり方がまるつきり子供だ。

だから、剣崎さんから仕事の依頼が来た時真っ先にやった事は、尖閣諸島に高速移動魔法で移動して尖閣諸島に発生してる次元回廊を囲むようにして自然災害反射魔法を展開しそれが全て中国本土にい

くように設置したのだった。

政治が悪いのは市民のせい、これが雪の考えだった。それに、最近の中国は自然を破壊しすぎて為、精霊が離れていつてる。

否、もうほとんど残ってないと言っても過言ではない。精霊に見放された土地は砂漠化し人が住めない土地となってしまう。

だから、さしたる抵抗もなく中国本土までストレートに災害指定ルートが作れたわけだが・・

まあ自業自得と言えるだろう。

それに何万人、否。何億人死のうが雪にとってはそんな事はどうでもいい事だ。

人道的配慮から見れば、決して許されない事だが今回の事をそもそも起したのは中国の身勝手な理屈から発生してる事でありそんな事でわざわざ動くほど無駄なカロリーの消費はしなくなかった。

だからこそ、中国以外には一切災害がいかないように正確無比な魔法を展開していた・・

そして、その事を剣山を通してアーカムには話してあった。

## 交渉は紳士的にしましょう

2011年7月27日

一人の女の子が複数人の男性に囲まれていた。

囲まれてる箇所は駅の近くにある本屋の裏にある駐輪場であった。

午後22時を過ぎてる事もあり、人通りは疎らであったが、時々通りすぎる日本人は男たちの空気を察したのか誰も近づいてこない。

「鈴木 雪さんですね？」

なまりのある日本語でその男は話してきた。

雪はその男と周りを囲んであるダークスーツの男達を見て、

「違います！人違いです！！」

とさらりと嘘をついた。

男は嘘を言われた事よりも、まったく怯えていない凛とした態度に驚きを覚えていた。

普通ならばこんな時間にこんな、身長が160にも満たない少女がいきなり十数人の180を超える男に囲まれたらパニックになるだろう。

さらに嘘までついて見せた。それに大してついつい苦笑いをしてしまったのは仕方無い事だろう

「ワン、彼女を見てどう思う?」

「どうでしょうか?何も感じませんか?」

「だが、その筋で雪という少女がなんらかに関っていると入ってきているしそのためかなりの資金も注ぎ込んでるんだぞ。」

そう言いながらも用意しておいた言葉を発する。

「我々も手荒な事はしたくない、雪さん、ご両親の身を案ずるならば我々とご同行をお願いできますかな?」

「っ!」

雪が大人しく従った事に気分を良くして近くの港に用意した仮拠点に車は入っていった。

「こちらへどうぞ、」

そういわれ、入っていくと何もない空間があった。

実は、雪はここに連れてこられる間に精霊を使って両親の安否を確認していた。監視がついていたようだがすべて風を使って眠らせておいた。

「それでは、少しお話でも・・・」

「する気はないな！」

「なら、ご両親に少しお手伝いでもしてもらいましょうか？」

と無表情でリーは言ったが

それに大して、雪は首を横に振って

「残念だが、親を監視していた奴らには眠ってもらった。そんな交渉は無意味だ」

そう言われた瞬間、ワンは信じられないと言った顔をした。

何せ、雪は一切何かをした気配を感じていなかったからだ・・・

「とにかくだな・・・《俺》はこういう交渉の仕方をしてくる奴が嫌いなんだよ」

「有利な立場から相手を追い詰めて、何かをやらせて利を得ようとする奴らはな・・・お前らはどこの者か知らないが、只で済むと思うなよ？」

雪はそう言い、思考モードを切り替えていく。より冷静に、より正確に、より冷酷に・・・

それを見ながら、リーは長年の軍経験から前にいる少女は危険だと察した。ワンモリーと軍の特殊経験を受けてきた者達から離れる。

ワンモリーもさすがに20人を超える特殊部隊ならば押さえ込めると考えているが、

そう考えた瞬間、目の前の兵士が3人壁に向って吹き飛んだ。

3人の兵士は少女をはがい締めにしようとした者達だ。

もう一度その少女を見たが、さつきはジーパンにポロシャツ姿だったのがいつの間にか黒いスーツに変わっていた。

数人の兵士がベレッタを構えて威嚇射撃をするがその中の一発が兆弾して服にあたりそのまま弾かれた。

それを見てた、リーはこの少女に恐怖を覚えた。この少女は少女の形をしたナニカだ・

すでに当初の目的を捨て、危険物を排除する為兵士に銃を撃つように命令した。

雪はそれを見ながら、冷えた心の中で、こいつらどうするか？と考えていた。

法治国家しかも銃刀法違反がある日本でこんなドンパチするくらいだから真つ当な連中で無い事は想像はついてる。

それに生かして返したらまた問題が起きそうだしな・・・

そう思いながらも、銃を全て高防御圏ホーククレトウスにて逸らしていく。ワンはそれを見ながら驚愕していた。なんだ？あれは・・・術ですらない？あんなの見た事も聞いた事もない。

4人目の兵士に瞬歩で近づき、突然目の前に現れたことに驚愕して兵士の腕が丹田を通して強化された手刀を振り下ろされた事により本来曲がらない方向へ曲がっており腕の骨が飛び出ていた。

倉庫内でその男が発した絶叫が木霊し、次々と兵士が沈黙させられていく。

ある者は壁まで吹飛ばされて、またある者は銃をもってる手を潰されて、またある者は足を折られ倒れたあと指を足で踏みつけられて潰されていた。

リーとワンはそれをたった10秒程度で行った少女に対して恐怖心を抱いていた。

戦闘力にはない、当の昔に日本人が失ってしまったものだ。

リーは、銃を売ったがそれは、硬気功を纏った手のひらに止められてしまっていた。

「ば・・・かな・・・拳銃の弾を素手で止められる人間がいるなど・・・」

実際、リーが知らないだけでこの世界には拳銃の弾を止めるどころか銃の弾速より早く動けるチート級のスプリガンもいるわけだが・・・

ワンが何かをしようとしていたのを察して、

その瞬間に、ワンの足元から大量の石つぶてが上空へと舞いそれに叩きつけられてワンが床に転がった

それを見てたリーは、近寄ってきた少女に対して両手を上げて降参の構えを取っていた。

そのまま、殴り飛ばされたのだが・・・



不真面目に作戦開始！（前書き）

ふさげた交渉を、ゆっきゆっきにしてやったあと・・・

## 不真面目に作戦開始！

アーカム財団日本支部第1会議室

そこでは雪がえーって嫌そうな顔をしていた。

「剣山さん、なんで俺の方が患者扱いなんですか？先に手を出してきたのは向こうでしょう？」

「雪、お前なあ、いくら正当防衛って言っても20人中17人は重症で病院送り、半年コース直行の上残り3人はICU（集中治療室）だぞ、国際問題に発展する問題だぞ？わかってるのか？」

「でも、撃つていいのは撃たれる覚悟のあるやつだけだって心の師匠も言っていましたよ！！」

雪も反論も反論するが

「どこの世界にそんな物騒なことわざがあるんだ？」

「とにかくだ、相手さんは今回再度尖閣諸島に送り込む軍の中にお前が同行すれば不問にきすと日本政府側にも要請がきた。まあ自業自得だな。中途半端に痛めつけないで殺るときはきちんと殺って死体も見つからないように処理しておかないところという事になるって事だ。いい教訓になったじゃないか。」

「くっそー、せっかく一週間の纏まった休みが取れたってのに・・・」

「俺の、休日の女の子達とのせつないアドバンスチュールはどうなるんだ！」

どんどんとテーブルを小さい手で叩きつけてる姿を見ながら

「そもそも今のお前は女で女性と遊ぶ事はできるが、それで切ない事は起きないからな。しかもアドバンスチュールじゃなくてアバンスチュールだからな！」

さりげなく突っ込んだ剣山に向けてぷーっと雪は頬を膨らます

さらに、

「必要な物を用意して、明日羽田のM2ハンガーに来てほしいそう  
だ。お前がもちろん叩きのめした二人も入ってる。明日、送るから  
早めにここにきてくれ。」

はあ、という感じが見えるほど落胆した顔で雪は本当に仕方なく

「ふあ〜い」

すでに机に額を擦りながらやりたくねーという意思表示を出しながらも仕方なく同意したのだった。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

2011年7月28日AM10時

アーカム日本支部の前には、剣山と山本と雪が並んで車が来るのを立ってまっている。

頭の頭上に広がる青空を見ながらあー晴天だな

「今頃、こんな理不尽な事がなければコールセンターのお姉さん達誰か一人くらい彼女に出来たかもしれないのに・・・」

と心の中で雪は思っていた。

「おい、お前。思考が言葉になってるぞ。それに今、お前女なんだから彼女が出来るわけない」

剣山がすかさずツツコンでくるが、テンションが急降下してる雪にとってどうでもいい事だった。

キツ・・・と言う音とともに前に車が停止した。

雪はそれを見て・・・

「・・・・・・・・リムジンって初めて本物見たかもw」  
と思っていた。

「おい、だから言葉と思考が逆になってるぞ！」

再度、剣山は突っ込んでいた。

「剣山副所長があんなに砕けた口調で話すのも珍しいな。まあ彼女いや彼はかなり稀有な存在だからな」

リムジンに乗って羽田空港のハンガーに着くまで雪の思考の中ではドナドナにしてやんよーと音楽が流れていた。

2時間ほどしてから羽田空港のM2ハンガーに到着した。そこには軍用機が止まっており軍人ポイ人が100人くらいいた。どうやらその100人と今回の作戦にいくらしい。

らしいというのは中央軍事委員会 副主席 リー・リンウー より聞いた話だから・・・

なんか本国の立場もあって結構偉い人らしいのに同行するとの事。ご愁傷様です。

そういう事もあり、沖縄の那覇空港で一度補給をしてから尖閣諸島に移動していった。

日本は現在晴天な事もありここまでは問題なく来ている。

ちなみに今の服装は運動靴にトレンカを穿いてミニスカ+キャミソ

ールというお前どこに遊びにいくんだ？という服装をしている。

だって軍用の服ってイタイんだもん。

そんな適当な格好をして荷物も少ししか持たずに参加してる雪を、祖国を危機を救おうとする兵隊さんからしたら信用できないのは当たり前であったが、遥か上の上官が同席してるだけあって表立って文句を言われることはなかった。

ぶつちやけ言われても言語変換魔法を使う気にならないので日本語意外理解できないが・・

しばらくすると、雪が展開していた障壁を越えたようで雲行きがおかしくなってきた。

機体の窓から外を見ると大分大きくなった島が見て取れる。

「うあーめんどくさそう」

思わず呟いてしまった言葉に何人が反応したようだが・・日本語理解できるのかな？

とどうでもいいことを考えていた。

そのうち機体は島の上空を先回し少ししてから、次々と兵士の皆さんはパラシュートつけて荷物と一緒に下降していくじゃないですか・

「はあ、仕方ないな・・・」

そのまま雪は、パラシュートをつけないで機体から飛び降りた。

## 失われた複写眼（前書き）

無理矢理連、尖閣諸島の異常現象を封印or破壊する為のチームに  
組み込まれた雪、どうなる？



## 失われた複写眼

「ばかな・・・パラシュートなしで飛び降りるだど？」

そういいながらも李は王へ続き軍用機から飛び降りてからパラシュートを開いて島へ降下していく。

島の大きさは淡路島と同じくらいである。尖閣諸島の後に現れた島としてはありえない大きさである。

そのまま降下しながら李と王は雪の降下していく様を見ていた。

「雪とやらは死ぬつもりなのか？」

そう李は思っていたが、

「レイウィング  
《翔封界》」

雪は小さい声で魔法を唱えた。それにより落下速度の減速がコントロールされた速度へと調整される。

「一体何をしたんだ？」

風水術師として国内で両手の指に入ると言っても過言ではない王は驚愕の眼差しで見っていた。

雪はその視線を気にしてはいなかったが、見えてきた島に対して違和感を覚え始める。嫌な予感がし、一気に落下速度をあげて地面へ降り立つ。周りは人の手が入っていないとされる森のようであったが懐かしい感じもしていた。それと同時に自身を取り巻いている精霊達が眠りに入っていく。

「なんだ？」

困惑してる間にも精霊達が沈黙してしまっていた。

その間も先ほどの李が指揮する部隊は段々と森に近づいてくる。

解析するために、一度目を閉じて再度開ける。目に朱色の幾何学的な五芒星が浮いてこない・・

33

アルファステイグマ  
「複写眼すら封じられてる？」

本来、一般的な日本人である雪は先天的な素質がない為、複写眼を通じて、魔法・精霊術を使用している。そのため、複写眼が使えないという事は大半の魔術が一切使えなくなってしまうという事だ・・

それでも、精霊と直に契約を結んでる魔術は自身の存在の力を強引に喰らって発動できるから問題はないが・・

「まあ、考えても仕方ないか・・・」

「雪さんは空を飛べるんですか？」

後ろから王が話しかけてきた。

「ええ、まあ下降の時の速度減少程度でしたら・・・」

かなり雪自身は控えめに言ったが、風水をしてる王としてはそれは伝承にある仙人に近い体術で成し得える物であった為、かなり衝撃を受けていた。

「全員いるか？一度ベースキャンプを川の近くに作る。先ほど下降していたときに見つけた河川まで移動するぞ、距離的には500mほどだ。」

李は部隊を整えてさっさと川の方へ進んでいってしまった。

王と雪もそのあとについていった。

「雪さん、何故か先ほどから誰かに見張られてる気がするのですが？」

「・・・」

俺、気配とか察知する能力0なんだけどw

雪がそういう事を考えてるとは思わない王は、雪が何か考えてると思っていた。

しばらくすると川が見えてきた。河川敷は広さが200mほど開けておりベースキャンプをする上ではこの上ない状況であろう。

何人かの隊員が水を汲みに行こうとするが、其れを見て

「ここにある物は一切口にしたらダメだ！」

雪は叫んでいた。

何故だかは分からないが、今まで、数多の世界に召還されてきた経験が無意識的につけていた。

ここは危険だと・・・

結局、その日は回りと周回する事にし、すこしづつ探すエリアを広げていく事にした。

雪は不思議と喉の渇きも空腹も感じることは無かった為。周辺を一人で見回りに行く事にした。李をはじめ、部隊の人員は飛行機の中のこともあり、そんなに親しい間柄ではなかったが、女性が一人で森の中に調査しに行く事は危険だと思い、ついでこようとしたが雪より直に遠慮された為、持ち場に戻っていった。

雪がベースキャンプから離れる際に

「雪さん、私もご同行していいですか？私も周りの森には興味があ

るので・・・」

仕方なく、雪は王の同行に対して断っていたがしつこく食い下がってきた為、結局同行に対してOKをだした。

森の中を歩いていると近視感というかそういう物をやはり感じていた・・・

雪は、初めて来た場所なのになんでこんなに懐かしいのか不思議に思っていた。

「王さん、もう私が怪我させたのは大丈夫ですか？」

「え、ええ。大丈夫ですよ」

普段、自分を狙ってきた者に対してはまったく心を動かさない雪としてはありえない事だったが・・・

特に戦闘モードに移行してる精神状態だった時の事を謝るなんてありえなかった・・・

そんな事を異世界に召還された世界で気にかけてたら命を落とすからだ・・・

「なんか、すごい不思議な森ですよね・・・？」

思わず、自分が怪我をさせた王へ声をかけていた。

「そうですね、まだ16時なのにこんな鬱蒼とした森は見た事がないですね。本当は雪さんがいなかったら怖くてこんな見通しが悪い

森にはこれなかったですよ。少し不気味じゃないですか？」

「え？」

思わず王の方を見てしまった雪は、自分がポカーンとしたまま相手を見てる事に気がついていなかった。

王も前を歩いてきた雪がいきなり自分の方を向いた為、思いっきりアワワな雪の表情を見ていた。それを見ながら、ここに着てから雪さんはずいぶんとやわらかい印象になったと思っていた。

「こんなに綺麗に木々が輝いて土から光が溢れてきてるのに見通しが悪いですか？」

「雪さん、何を言ってるんですか？こんなに見通しが悪い森なのに・」

「もしかして、雪さんの見てる森と私達の見てる森の姿が違う？」

「ええ、たぶん・・・」

「河川敷にこの時間なのに早めにベースキャンプを張った原因は見通しの悪い森と不気味な感じが皆さん拭えない為、早めに拠点を作ったんですよ。」

「そうなんですか・・・」

そういいながら、雪は周辺に広がる森と光る粒子を見ながらとても懐かしい思いを描いていた。

そのあと、何事も無く河川に戻り、ベースキャンプの部隊と合流した。

「李さん、通信は取れましたか？」

「いえ、ダメですね。衛星電話すら繋がりませんよ」

「そうですか……」

しばらくしてから雪は女性という事もあり小さいテントを一人だけもらい其処で眠りについた。

「……ここに……長くいては……いけない……」

「……早く……かえりな……さい」

とてもとても懐かしい声が聞えてきた。

「あなたは誰？」

雪はすぐに夢の中で覚醒した。夢を夢と認識するのは小さい頃から得意だからだ……

「私の名前は……」

そう言いながら泣きそうな顔を向けて雪を見てきた。

そしてそのまま首を左右へ振り口を嚙んでしまった

「ここはどこなの？あの森はなんなの？」

「あの森は残った存在・・・そして・・・」

「わからないよ！どついう事なの？」

そついいながらも雪は自分が女言葉を話してる事をまったく自覚していなかった。

「はやく・・・ここを閉じないと・・・」

「閉じる？」

「アウラウ・・・」

それと同時に夢の世界から覚醒するのを感じ目を覚ました。



眠りし世界と・・・

「うん」

時間的には午前5時くらいだろうか？雪は普段の低血圧の目覚めではなく清々しい目覚めだった。

テントから出て数人が雪を見て驚いていた。

李も雪を見ると目を見張っていたが、近づいてきて聞いてきた。

「雪さんですか？」・・・と

「そうですね、李さん何を言ってるんですか？」

花の咲くような笑顔で言われて、どもりながらも李はそのまま答えた。

「いえ、全体的に感じが違ってますので・・・」

「そうですね？」

そういうと、雪は少し隊列から離れて数少ない荷物の手鏡を出して自分を写して覗き込んだ・・・

そこには黒い目が紫と緑のオッドアイに変わり髪の色と眉毛が透き通るような銀色に変わっている女性の姿が映っていた、

え？私なんてこんな姿に？

あれ？なんで思考も女性に？

ふと気配を感じると周りの森には多数の動物がこちらを見ていた。その動物達は光り輝いており雪の方を見てるようだった。

流れてる川の色も変化しており、色が本来の透き通った水の色ではなく金色の川であった。

それと同時に契約してる魔法も強制的に封じられてる事に気がついた。

「どづいう事なの？」

そのあとは軍の人がもってきた食事を食べていたが・

「味がしない・・・？消しゴムか何か噛んでるみたい・・・」

そう言っただけで食べる事をやめてしまっていた。

「李さん、ちょっと気になるんですけど、周りにいる動物さん達って見えますか？」

「いえ、見えませんが何か、見えるのですか？」

「ええ、光っている動物達が見えます。昨日までは木々が光ってい

たり、地面から立ち上る光が見えるくらいだったのですが・・・」

「あと何か気になった点がありますか？」

「はい、川の色が金色になっています。」

「金色に？」

怪訝な表情をしながら李は走って川まで行って様子を見てすぐ戻ってきた。

「私には普通の川にしか見えませんが？念のために携帯してきた物意外は食さない方がよさそうですな」

「ええ、その方がいいと思います。」

「李隊長！」

一人の兵士が走ってこちらに向ってくる。ついたときはすでに息を切らしていたけど、李が話を聞くと

「少し離れた所で3週間前に派遣した我が軍の兵士の服だけが見つかりました。」

「服だけだと？他には？」

「あとはベースキャンプがそのままになっていました。人だけが忽然と消えてしまったようです。」

「ふむ、わかった。王を呼んでくれ、風水術でこの島の状態を見てもらおう。全員を一回集める」

そういつて李は離れていこうとしたが、

「李さん、少し森の中で散歩してきてもいいですか？」

雪の話に李はこいつ何を言ってるんだ？という表情をした。今、別の部隊のベースキャンプが発見されて尚且つ生活跡が残ってるままで人だけが消えてるのだ・・・これが異常事態と言えずなんと言えよう。

「大丈夫ですよ、ベースキャンプにすぐ戻ってこれるようにしますから・・・」

少し、雪が話した内容についておかしいと思っていたが、許可を出した。

雪は李が離れていったのを確認すると、森の中に入っていった。雪の周りには光に囲まれた動物達がついてきており主を守るうとしているようなようだった。

10分ほど森の中を歩くと一つの泉が見えてきた。

その泉は水が入ってるとは思えないほど透き通っており中央には巨大棺が鎮座してあった。

雪はそれを見て・・・

「ハースアール」

と名前だけ呟いた。

そこから少し先を見ると建物のような物が見えた。

そちらへ、木々の間を抜けて歩いていくと一つの小さい神殿が目の前に現れた。

太さは1m程度の柱でオリンポス神殿のような様式で作られており  
大きさは東西50m程度

その中に雪は入っていき、ひとつの壁画の前で立ち止まりオッドアイ  
イになつて目で見上げた。

そこには、供物として捧げられた女性と一振りの剣そして・・・

## 夢と少女と

ハッ！

両親と住んでる家の2Fの自分の部屋のベッドの上で一人の黒髪の少女が目を覚ました。

カレンダーに書いてある日付は2011年6月12日……

「なんだろう？ なにか大事なことをしていた気がするんだけど？」

いつものように朝のニュースを見ていくが、相変わらず尖閣諸島では中国が採掘をしてるだのいとしていたが……それを見ながら、雪は違和感を感じていた。

「あ！ もう時間が……学校始まっちゃうよー」

「お母さん〜なんで起きてくれないのよ？」

「もう、高校3年生なんだから自分で起きるくせをつけなさい！」

「お母さんの意地悪〜」

ぷーっと頬を膨らませて、雪はぶんぶんしていた。

「ねー、お父さんも、お母さん意地悪だと思っわよね?」

「あらあら、今度は明人さんまでヘルプなの?」

「ふうんだ、別にいいもん」

「ほら、行ってきなさい、今日が女子高の最後の日でしょ。卒業式くらいきちんとやってきなさい。」

「はい、行ってきます。」

そういつて、雪は両親と妹が住んでる家を出ていった。

.....

「うわー遅刻しちゃうよー」

自転車のペダルをくるくる全力で回しながらなんとか時間ぎりぎりに教室についた。

「まったく、雪はあわてんぼうだな」

「うるさいなもう、安部ちゃんは大まってよね」

「それじゃ嫁の貰い手は俺くらいしかないな?」

「もう、嫁の貰い手って橋口さんも女の子でしょ!」

「お、先生が来たみたいだよ」

「そこのお前達静かにしろ!」

「「「はい」「」」

卒業式が終わり、高校終っちゃたねー

「うん、でもこれでみんな分かれるわけじゃないから!ずっと一緒だよ」

「うん」

「それじゃあとで皆で打ち上げにカラオケいこうぜ!」

「うん!」

「それじゃ着替えたら、駅前集合な」

そうして、みんな校門から家に帰宅していった。

.....



あれ？私・・・何してたんだっけ・・・？

そう・・・学校からの帰り道・・・

信号待ちしてたら・・・大きなぶつかる音が耳元から聞えて・・・

・・・そのあとが思い出せない・・・なんで？

なんで？・・・あれ？

なんで、皆、私の前で泣いてるの？

わたし・・・わたしってだれ？

みんなって？

みんな？

・  
・

・

・  
・  
な  
・  
か

だ  
・  
れ  
・  
な  
・  
の  
・  
・  
・  
・  
？

少しずつ浮上していく意識……だが覚醒には程遠い……

汝、我と契……と共……み……  
……  
……  
世……  
……を刻むか？

そうして、一人の少女の意識が消えた

アウラウストウルの楔そして・・・

「あれ、何か夢を見てた気がするんだけど・・・」

雪は着物を急いでできてから、実家の庄屋から出た。

「お嬢様どちらへ行かれるのですか？」

奉公人の一人が聞いてきた。

「ちょっとそこまで行ってくるわね。あ！簪ももっていないきゃ！」

しばらく歩いていると、魚市場が見えてくる。

たくさんの今日水揚げされた魚がたくさん竹の網に干してある。笹の葉に包んで運ぼうとしているのは料理亭にもっていくものだろうか？

そんな事を考えていると目の前に新撰組の駐屯所が見えてくる。

「今日は近藤さんいらっしやるかしら？」

浮ついた気持ちで新撰組の駐屯所に入って行った。門にいる隊士の人もすでに顔見知りの為顔パスだ。



その女性は男性の名前を口に出していた。

「ハースアール、貴方が悔やむ事ではないわ。世界はもう終わりに近づこうとしてるの。」

「だが！君が犠牲になる事はないではないか！」

「君は永遠に苦しみを背負い繰り返し行き続けないといけないのだぞ？」

「言わないで、もう決めた事だから・・・」

「ハースアール 意味は世界の原書なる光 私の名前・意味は・・・」

だから貴方は生きて・・・

そしてこれから生まれてくるたくさんの子供達に愛を与えてあげて

だからこのアウラウストウルの楔で私の魂を閉じ込めて世界を救って・・・

もし、綻びができたならその楔を抜き再度突き立てれば封じることができるわ」

「だが・・・それでは君の魂が囚われてしまつではないか・・・」

「大丈夫、囚われてもまたあなたと会えるわ。だから泣かないで・・・」

その瞬間視界が暗転した。

.....

「ここは？」

レリーフの前で雪は立ち尽くしていた。瞳からは涙が流れていた。

同時に精霊力・魔力が回復していくのを感じる。

解析しようと目を閉じて開く、朱色の幾何学な五芒星が展開される。





ピピピピ

携帯電話の音で雪は飛び起きた。

あ！やば

日付を確認すると2011年6月12日

そのまま雪はアルバイトに向った。

世界は尖閣諸島の爆発の時間まで巻き戻されていたようだ・

俄かには信じられないけど、いまだに尖閣諸島の事で領海侵犯だとか言ってるし

覚えてるのは俺だけけど・・・俺も意識を失ってた間に見た夢はほぼ損失してるし意味が分からないまま終ってしまった。

結局何万人も死者が出ていた中国も何も無いようだった。

今回の内容はわけが分からない内容が多すぎる。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9737t/>

---

失われた世界

2011年9月1日22時37分発行